

第1回石巻市震災復興基本計画市民検討委員会要旨

1. 日時・会場

平成23年6月14日（火）18時00 石巻市役所 庁議室

2. あいさつ

- おばんでございます。第1回の石巻市震災復興基本計画市民検討委員会のご挨拶をさせていただきます。皆さんには震災後のお忙しい中、検討委員会委員を快く引き受けていただき、誠に有難うございます。本市が復旧・復興・再生を遂げていくための根幹となる基本的な考え方として「災害に強いまちづくり」、「産業・経済の再生」、「絆と協働による共鳴社会の構築」の3つを基本理念として定めたところである。
- 震災復興基本計画の策定に当たりましては、広く市民のご意見を頂きながら策定して行きたいと考えている。委員の皆さまには時間のない中ご負担をお掛けすることとなりますが、石巻市の新しいまちづくり、復興を目指してお力添えいただきたく、どうかよろしくお願ひしたい。

3. 委員会趣旨説明

- 設置要綱について説明

4. 委員長あいさつ

(小野田委員長)

- 今日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。私ども東北大学は被災地域の中心にある大学として、総力を上げて被災地を支援しようと特務チームを組んでおり、その中でも石巻市は宮城県の中でも仙台市を除いて、一番大きな都市であるとともに非常に複雑な被害状況を持っており、東北大学の総力を上げて支援すべきところであると考えている。石巻市と東北大学とで包括協定を結んで、持てるものを出しあって震災を乗り越えていこうというプロジェクトが始まりつつある。
- 本来ならば浅野会頭が委員長となって粛々と進めることが姿かもしれませんが、復興のスピードやさまざまな技術が関係しており、実務的に皆さんの幹事役として一日も早い復興に繋げていくという意味でこの席に座らせていただいております。皆さま方の力を合わせて創造的な復興に向けて努力していく所存ですので。ご協力よろしくお願ひいたします。

5. 会議資料説明

- 本市における被害の状況、震災復興基本方針
- 石巻の都市基盤整備に向けて、別冊第1回資料

6. 要旨：議題「減災まちづくり」

(小野田委員長)

- 本日は、災害に強いまちはどうしたら実現したらいいのか、2回目の「産業経済の再生」、3回目の「生活再建」をテーマに即して集中的に議論して行きたい。東北大学の日本の津波の第一人者である今村研究室で津波シミュレーションをしながら（別紙石巻市街地氾濫計算）、最も合理的かつ安全なまちづくりを皆さんを中心にコラボレーションによるまちづくりを作っていきたい。各委員の皆さんには自己紹介と減災まちづくりに関して一人2分程度でお話を頂きたい。

- 防災については素人であるが、住んでいるのは川のそばでチリ地震津波、宮城県沖地震を経験したがゆえに逃げ遅れたがなんとか命を保つことができた。堤防については必要であると考えますが、100%造ることは無理であり、道路を高くすべきであると考えます。
- 市のボランティアセンターと連携してボランティアのまとめを行っており、市内の泥出し、避難所のケア、最近ではダニバスターズなどの活動を行っております。そこでやっている観点から今後、お話をしたいと考えています。
- 会社を経営しているが、事務員さんが被災されて亡くなってしまった。津波が来ることを知らせることや安全でスムーズな避難経路、40年～50年1回大きな津波が来ており、忘れない対策、語り継ぐことが必要と考えている。
- 自然に畏敬の念を持ちながら進めていくべき、市の対応が遅く、湊側では津波警報が出ているのがわからなかった。総合支所に権限を与えるべきである。
- 南浜町の町内会長を長くしていた。今回の津波では頭から冷や水を掛けられた。地方自治は安全安心のコンセプトが欠けている。この教訓を生かし、安全安心を優先するべきである。
- 総合支所には通達、伝達の権限がない是非、改めていただきたい。三陸津波の時には38mの津波が押し寄せており、想定外ではない。今回の震災を生かして避難所の設定の仕方を考えるべきである。防災訓練のあり方や女川原発も考えるべきである、牡鹿は道路の通行止めが、最が多く、陸の孤島となっている道路の整備を第一にやって欲しい。
- 防災訓練を毎年していたが、本当に津波が来るのか疑っていた。防災訓練をしていたお陰でたまたま生き延びることができた。
- 石巻では海から逃げて仕事をすることはできない。働き場所をどのように防災設備で守れるかが重要であるが、全部を築堤で造っていいということではない。住居の高台への移設は検討する必要があるが、避難道路や人命を大切にする高台的な建物、避難ビルを目安として建てて欲しい。高台だけに住めない人もいることも考えて欲しい。広報については聞こえないところもあるので放送システムをご検討いただきたい。
- 避難所で2ヶ月過ごし、皆さんと避難所で話し合ったことをお話したい。市の職員も企業の方も不眠不休で精根尽き果てるまでやってきた3ヶ月間、同じ思いで過ごしたことを代弁したい。また、災害弱者といわれる方々、高齢者の方々の意見も耳に入ってきているので意見を届けたい。
- 住み慣れた地域で安心して生活を営むことが原点である。学校を防災拠点とするならば適切な避難所の運営体制づくりをお願いしたい。そのまま災害に強い地域づくりになるのではないかと感じている。学校の防災教育というソフト面に、施設のハード面も含めた両面で防災機能の向上を目指していただきたい。
- 安全を確保した上で、商店街としての景観を保ちながら便利で楽しいお買い物場と、どう整合性をつけるかを中心に考えて行きたい。商店街は人が集まる場所であり、大きな建物を作って避難所にもなり、情報も早く正確に伝わる場所の整合性をこの委員会で考えて行きたい。
- 古くから川岸で商売をしており、水という要素なしには考えられない。堤防を造ると個性的な中瀬、川、市街地がすべて反故にしてまで安全というまちづくりを考えていいものかどうか、ソフト面で対応すべき部分はソフト面で対応して、市街地をスプロール化させないよう、安全を確保しながら市街地を魅力的に再構築していけるよう議論していければと考えている。
- チリ地震津波の経験地などが邪魔をし、津波への甘えの構造があった。高台への避難所、避難路と防波堤のセットが重要な武器ではあるが、何よりも重要なのは通信インフラであり、国家的なプロジェクトとして取り組んでいただきたい。
- 津波がどれ位の高さで来るのか、精度を高めることを国家プロジェクトとしてやって欲しい。堤防や防波堤を作っても防ぎ切れるわけではない。スムーズな避難路の確保、途中途中の避難所、ソフト面での教育が必要である。ヨットハーバーの繋留による川岸の被害が大きい、災害にならない場所に確保する必要がある。経済的損失に備える津波保険、損害保険のようなものが考えられないか。特区によって保険を充実させる100%国が保証する制度を考えられないか。
- 海岸線に丈夫な堤防を作る。農業の意欲を持ってやっていたが、今回の災害にあってもやれることはやりたいと言っている。風力や太陽光発電なども考えられる。河北独自のアンケート調査も行っており、検討しながらやって行きたい。今回は、宮城県沖地震のハザードマップのデータが逆に災いした。地震学の精度をもっともっと上げて欲しい。
- 地域の中で避難できる場所が良いのか悪いのかを含めて議論して頂きたい。そのためにもシミュ

レーションが重要である。若い世代、地域を盛り上げる世代が働ける場所の確保が急務であると思っている。

- 今回のような津波を防災するのは難しいと考えており、減災を中心に考えるべきである。中心市街地にも大きな被害はあったが建物は残っている。エリアによって減災、防災のあり方、対策を変えていく必要がある。街中については、津波避難タワーのようなものを一定の距離で設置するのも効果的ではないか。防災無線で知らせる方法が必要。中心市街地は減災まちづくりの先行モデル地区とする。民間企業はスピードもあり、低コストで復興に向けて動き出せる。税制や制度上の問題を解決して、民間活力を活用すべきである。
- 原子力発電所から河南地区は 20 km 圏内にあり、是非、原発も検討に入れていただきたい。想定外という地震という言葉が使われ、これで帳消しにしようとしている、防災は根本から見直すべき。北上川も亀裂が入り破堤が考えられ、塩水対策など農業への関心を持って頂きたい。避難所は名ばかりの避難所であった。
- 3 月 14 日から停電の中、手探りで診療をはじめた。市立病院、市立雄勝病院は壊滅的な被害を受けており、市民の健康安全を考えるべきである。石巻の私立病院、特に雄勝町に市立の医療機関を立ち上げるべきである。新しいまちづくりに協力して行きたい。
- 木の屋石巻水産の工場は全滅した。牡鹿半島の漁師さんの話を聞くと津波が来ることがすぐわかったという。津波がなんとなく来ないという甘さが逃げ足を遅らせた。まずは津波から逃げるのが基本。スーパー堤防を造ることが安いのか、予算から入るべきではないか。
- 学校施設の指定されている避難所と指定されている避難所で支援物資などで対応に差があったと聞いている。ある学校では、間借りしてひとつの学校が 3 つに分散して授業を行っている現状である、仮校舎の設置など改善する必要があるのではないか。学校のグラウンドが仮設住宅になっている、致し方ない面もあるが、教育活動が制限されないことを考えることも重要である。
- 東西の道路が信号停止で込んでいた、停電でも停止しないように欲しい。抜け道を使って海側と直角に牧山に逃げたため助かった。通信インフラが重要である。FM 石巻がきめ細かな情報を送ってくれたこれらを充実させる必要がある。水産業界は、これまで 11 回の水産復興会議を開催している。その中で高台か高い建物か、経済活動と合わせ反映させていただきたいと考えている。
- 渡波では防災に関心があり訓練を活発にしていたが、その割に多くの方が亡くなったのは避難場所に高台がなかったせいではないかと思う。今後は渡波地区の中心部に高台や避難所に防災用具が必要である。また、船の置場所もなく早急に岸壁を何とかして欲しい。
- 地区全体が流されたが、人的被害は少なかった子どものころから訓練が行き届いており、子供たちの犠牲はなかった。精度の高い正確な情報を早く伝達することを確立することが重要である。北上地区は陸の孤島となってしまう、携帯も繋がらない情報通信インフラの整備が重要である。高台移転についても、南三陸国立公園などの規制が課題となっている。
- 完璧なハード面を整備することは時間とお金がかかる。まずはソフト面の防災意識を植えつけることが重要。まずもって避難するには鉄骨や鉄筋コンクリート、高台の建物に逃げるのが鉄則と思っている。JA は避難所になっており、民間の避難所を含めて、具体的には皆さんとお話し合いをしながらやっていきたい。
- 防災無線は、聞き取れない地域がある。携帯も不通の中で防災無線は早急にできることではないかと考えている。避難ルートは、最短で高いところに避難することはコストがかからない中でできる。避難ビルや避難タワーについても当然のことであり、マンガ館のように波の勢いを受け流す構造が将来に向けて役立つと思っている。道路の二重防波堤は必要と思うが時間がかかる、北上川の無堤地区の早期解消、なんとか国に働きかけてルート決定と着工をお願いしたい。避難所にはドクターが必要である。避難ビルの中には食料、水、地震に強い自家発電を整備して欲しい。そして、災害を忘れない工夫、教育、シンボルを残すことが必要である。
- 商工会議所は、今年の運動方針を復興元年とした、産業が動かないと本当の意味で復興しないため、水産、工業、商業にポイントを当てて、専門的な運動を展開している。早くやらないと気持ち折れてしまう。津波対策については皆さんの話を聞いて安心した。逃げ道、逃げ場所、情報のソフト面を完備すれば津波は怖くない。コンクリートで津波と喧嘩するのは具の骨頂と思っている。

(小野田委員長)

- 先ほどエリアによって防災のあり方を変えた方がいいのではないかとのお話があり、その通りだ

と思う。今日は中心部をどう復興するかについてエリア毎の防災のあり方について議論していきたい。地域別の考え方について、具体的にどうお考えでしょう。

- 地形的な形や海岸の底で大分違う。雄勝地区などの半島の浜など類型を分けて議論をしないといけない。南浜は海岸が盛り上がっているわけでもないのに被害が大きかった。そういう地区でわけた方が、いずれくる津波の対策上も有効と思う。

(小野田委員長)

- 今、南浜町の話も出ましたが、なかなか厳しい場所とは思いますが、どう守りたいですか。
- やはり南浜町は、人が住む所ではなかった。人が住むところでないという石碑を建てて、世代に廻そうと思う。昨年2月28日の津波の教訓も生かされなかった。ソフト面、ハード面でやる分野、安全安心とは何かを総市民が議論する必要がある。中心市街地は、過去何度も築堤の論議があり、すべて挫折した。この場で方向を出して、行政当局にバトンタッチしたいと思う。

(小野田委員長)

- 無提地区の問題は、どうすれば挫折しないで競争力、魅力を保ちながらどうやって安全に守っていくのか委員の意見を聞きたい。
- 地域住民の安全に対する合意形成が大前提。まずはワークショップや意見交換会を頻繁に行い、出てくるイメージ、意見を取り上げながら防災対策を取りまとめるべき。石巻は、川港として川と共存しているエリアであった。江戸時代は川との接し方で住民の知恵があり、石巻には無いが、高い建物に船を置く現代版の水屋や堤防を作るのであれば逆に掘割りを復活させて、水辺空間を増やし、水を早く海へ還す工夫も必要ではないかと考えている。
- 排水がうまくいかない、掘割と連結したポンプ場の整備によりできる土木技術は進歩している。守りながら、景観を生かす方法をワークショップを頻繁に行いながら進めていくべきかも知れない。
- 中心商店街は、中心市街地の中でも堤防の高さは他地区と街の中では違ってしかるべきである。住む場所と買い物をする場所を分けるのではなく、ミックスさせたり、安全を確保された防災ビル、ペDESTリアンデッキとの組み合わせ、景観などと整合性をもったまちづくりが必要である。
- 堤防は生命を守るものであり、まちづくりか堤防か安全か、堤防はなんのために必要なのか是非、委員会としてひとつの方向づけをして頂きたい。

(小野田委員長)

- 堤防と魅力的なまちづくりは丁寧によれば両立はできるし、競争力ある商売できるまちづくりはできるということでしょうか。
- まちなかで任意で勉強会を行っている。堤防の問題が引かかる。東北大の先生にも入ってもらいながら安全とどこで折り合いをつけるか、全般に堤防を造ってもしょうがない。街中は低いに越したくないというのが街中では多い考え方です。あじ島ラインの新しい栈橋が意外ともっており、その背後が大丈夫だった。なぜかわからないがひとつの防波堤効果があるのであれば、ひとつの考え方かもしれない。

(小野田委員)

- 左岸の湊は如何でしょう。
- 湊で生まれ育って70年。旧魚市場があったが岸壁はすべて壊れたが、スーパー堤防は嫌だ。ある程度の高さは必要だが、6m、7mの堤防を作ろうという考えはない。川を見て育ったこともあり、安全安心は大切であるが、それにも限度がある。
- 街の中に長年住んでいるが、亡くなった方は、高齢者の方が圧倒的に多い、堤防は低いに越したことはないが、水が上がってくるまでの逃げる時間をいかに稼ぐかが重要であり、専門家の方に丁寧に検証して頂きたい。

(小野田委員長)

- 丁寧に検証しながら進めてマネジメントとして行きたい。
- 湊地区の中では、自宅の住宅仕様、2階建ての2階部分に生活スペースを置いたおかげで、被害は少なかった。地震では被害が少なかったが、後30cm土台が高ければ、2階までの浸水もなかった。そういうところもまちづくりに生かしていただきたい。

(小野田委員長)

- 流速が遅ければ、建築で防げることもできる。周辺の大街道の方はどう守ればいいのか、いかがですか。

- 大街道もそうであるが、皆さんが仰っているように堤防が低くなれば安全性が低くなる。避難経路の明確化を地区ごとにはっきりさせるべき、それぞれに明確に持っていればスムーズに対応できると考える。

(小野田委員長)

- 委員が仰ったように高台に直角に逃げることも重要であり、また、危険情報を弱者とも共有すべきであると思う。大変有意義な意見交換となりありがとうございました。

(亀山市長)

- 今回の津波のエネルギーにより、中心市街地はすべて浸水した。堤防は絶対必要であるという認識である。それとまちづくりをどうするかは別問題である。中心市街地と言いながら中心市街地は移っている。このまま復旧しても名ばかり残るだけである。この機会に本当に魅力あるまちづくりをする。人が住みやすく、災害に強いというまちづくりを進めないと中心市街地の名前を返上せざるを得ないというくらいの危機意識を持っている。是非、災害に強いまちづくりをどうやって進めるかを考えていただければと思っている。

(小野田委員長)

- 市長、大変力強いご発言ありがとうございます。競争力のある中心市街地でなければ意味がなく、安全と両立すべきだということであったかと思います。そのためにはハザードデザインは、土木、まちづくりの分野の防ぎをしながら一体化して進んで行かないとなかなか難しいと思っています。

(星室長)

- 次回につきましては、6月19日午後2時からとなります。分科会につきましては後日、希望を取らせていただきますのでよろしくお願いいたします。

(小野田委員長)

- それでは、最後に浅野会頭よりご挨拶いただきます。

(浅野副委員長)

- 第1回石巻市震災復興基本計画市民検討委員会ということでご意見いただきありがとうございました。こういった委員会ですと普段参加されている方は、いつもと違うと思った方もいると思いますが、今回は我々の意見を計画に反映して計画をつくる委員会であり、本当に良い案を出して密度の濃い日程で密度の濃い議論をしていただけるよう第一回目の終了の挨拶とさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

以上